

第三章

タール砂漠の児童労働

— 技能継承・債務労働・不就学



タール砂漠の青空教室(ラージャスタン州シカル県)

一 貿易問題としての児童労働

今、インドの筆頭輸出品目は製造業分野では軽工業品、とくに消費財が主力を占めている。伝統的インドカーペット、ジュエリー、銀製品、ブロック・プリント（木版捺染法によるプリント）の染織品類などが外貨稼ぎの筆頭株となっている。その多くはインド北西部ラージャスターン州の特産物、しかも伝統的手工芸品として長い歴史と独特な文化に彩られた、まさにエキゾチックな産品ばかりである。これらを生産する地ラージャスターンは一九四七年、インド独立まで藩王の支配する広大な砂漠の土地ラジプターナ (Rajputana) と称された地域である。ここに生れた伝統的手工芸品の数々は王族や諸侯などの領主がおもなクライアントであった。かつてはこれらを作る工人は王族達の需要にささえられた家族経営による手工業者であった。いわばお雇い職人達である。今はインド全土にその消費市場は拡大するが、生産と経営の基本は大きく変わることはない。もちろん、家族経営から会社組織による規模の拡大は徐々に進むが大規模な機械生産にはなじまない。依然として手工業の業態が普通である。さらに、産物のもつ独特の文化的魅力は世界各国、とりわけ欧米市場をとりこにする。すべてが伝統に培われた技術、技法を忠実に守り、継承され、そ

して、なによりも手工芸品としての美しい魅力を備えた産物である。とりわけインド伝統カーペットは欧米市場を席卷し始めると、そこに児童労働の隠れた姿に気づくことになる。生産の現場に悲惨な児童労働の現実を見ることになる。そして、驚くべき低賃金が「貿易財」のなかに隠され欧米のカーペット市場に現れていることを知る。一九九〇年代初め、開放体制への移行を宣言したインド経済は「不公正な労働慣習」と非難される児童労働問題をかかえての困難な船出となる。

本章では、輸出工芸品、とくに一、宝石装飾品、二、伝統的手織りカーペット、三、ブルック・プリントなど染織品の生産現場に見る児童労働の存在形態をとりあげ、これらが輸出品として欧米市場に送り出される姿を見る。生産と貿易に隠された児童労働の問題を伝統技能の継承という観点から考えてみたい。なお、これは不就学児童によって構成される「労働市場」という基本的な特徴を持つ事例であり、二章で扱うシバカシ村のマッチ工女の事例と同じである。同類の地場産業の事例ではあるが、生産と労働の制度化された諸慣習、いわば封建時代のギルド制の枠のなかにあるという特殊性がある。その今日的解釈が問題の核心部分である。これに加えて長い歴史のなかで完成された技法・技術と職人あるいは、工人の関わり方を伝統の技能継承、債務労働、そして不就学の関連で検討したい。

現地調査の過程ではそれぞれの産物に固有の生産プロセスを注意深く観察し、主たる調査の力点を子どもの労働投入が必要とされる技術的条件の態様とその解釈におくことにした。

独立後、藩王統治の時代が終わり手厚い保護を受けていた工人達はパトロンを失うことになる。しかし、広く「市場」という新たな経済活動の場が出現し、昔ながらの伝統工芸品を作り続けることになる。パトロンは政府に代わる。砂漠の地一帯に点在する産地はそれを構成する元大小藩王の居城、その下の工人のギルド組織をそっくり温存する形で手工業の振興という開発目的のために資金・組織・政策の面で手厚い保護を受けることになる。数々の優れた手工芸品は市場を通じて都市の富裕層や海外の消費者に提供される。この生産活動、あるいは別言すると、この工芸品に体化された伝統の価値継承という活動が今、国境を越えて広がりを見せている。九〇年代初め、欧米市場に登場しだしたこれら工芸品の製作には砂漠の子ども達が深くかかわっていることが知れるようになる。児童労働は国際貿易の枠組みのなかで指弾されるようになる。カーペットはその第一弾である。問題の背後にはこの砂漠の地に、長い歴史のなかで慣習化された徒弟制度が根づいていること、それを可能とする社会の階層制が固定していること、そして、なによりも非都市社会の経済的停滞と貧困、それらの矛盾が相互にあいまって子ども達を債務労働の現場に追いやる、と

いう構図がある。これが、砂漠の地にたつて組み立てた事例調査の大きな枠組みである。

二 砂漠の地シェイカワティへ

タール砂漠に築かれた大小の元藩王国に一歩足を踏み入れると、そこには人々を魅了し尽くす伝統と文化の遺産がたたずむ。Havelis と呼ばれる都市住居の建築物、今はヘリテツジ・ホテル (Heritage Hotel) として使われる数々の個性豊かな宮殿 (サモッドパレスはそのひとつ)、これらに描かれた壁画の数々、そして、博物館や美術館では、この砂漠の地が生み出した手工芸品の傑作に出会うことができる。ジャイプル市の博物館 (Central Museum, City Palace Museum, Raj Government Handicraft Emporium, Museum of Indology) には藩王国時代 (一九四九年まで) に製作された数々の美術・工芸品が展示されている。木版捺染法による染織工芸品、刺しゅうを施したデザイン豊かな布地、数々の民族衣装 (王族・諸侯から一般庶民まで)、宝飾品、ムガール・カーペット、皮革製品、ストーン・カービング、陶器類、など、伝統ある工芸品に目を奪われる。これらの歴史を調べるうちに次第にいくつかの特徴があることが判明する。それらを列挙すると、一、歴史のある工芸品であること、二、ギルド



写真：サモッド宮殿ホテル (Samode Palace) シェイカワティ地域調査の拠点ホテル

撮影：筆者【写真番号：03_002】

制（同業組合）のもとに主としてパトロンの藩王貴族の用に供されること、三、生産工程の主要部分は手作業によること、四、工人の伝統的技術・技法によって作られること、五、原材料は昔から使用されてきたものに限定すること、そして、六、ある特定の地域で産地形成されていること、などを挙げることができる。

かつての藩王国、今は連邦国家の一州ラージャスターン州の州都ジャイプル (Jaipur) へは陸路、デリー、または、アーグラの二方向から入ることができる。

一つは、インドの首都デリーとムンバイを結ぶ幹線道路、国道八号を経由する北からのアプローチ（約二〇〇キロ）。最初にこ

ラージャスタン州





写真：シェイカワティの農婦

と変貌をとげていた。急速な工業化、都市化の波が国道八号線にそって南下している。目に見える変化が進行している地域のひとつである。ラージャスターン州との州境にあるチェツクポストを過ぎると「シェイカワティ地域 (Shekavati)」が広がる¹⁾。

タール砂漠に近いチュールー県 (Churu) の、ある村で農作業中の婦人に出会った。両腕に二種類の腕輪をつけている。本人に聞くと、一つは夫への貞節・献身の証、もう一つは領主への感謝・忠誠の証、という。砂漠の民、ラージプート族の装飾文化のなかに伝統と歴史を想起させるに十分な出会いである。地図には見あたらない歴史上の地名、シェイカ

の道を経験した九〇年代初め、デリーの近郊グルガオン (Gurgaon) 付近はようやく巨大な工場団地が出現しようとする時期である。悪路と渋滞、建設現場の騒音と悪臭、いたるところに放置された事故車両の障害物など、やっとの思いで通り抜けた記憶だけが残る。九〇年代終わりが、同じ国道沿線は日本の自動車製造工場や真新しい高層住宅街があふれる一大工業地帯へ

ワテイとは一二の小都市をあわせ持つ広域地名（シェイカの庭園 Garden of Shekha）をいう。一五世紀（一四三三〜八八）、アンバー・ジャイプル王国の一部として家臣団（領主）Rao Shekha の支配・統治した地域でありつぎの一二都市からなる。筆者の調査対象は斜線・太字で示す。

Sanode, Sikar, Nawalgarh, Parastrampura, Dumlod, Mandawa, Jhunjhunu, Baggar, Fatehpur, Ramgarh, Mehensar, Lachhmangarh.

この地域はまた、マールワリ財閥を築き上げた商人達の出身地・故郷としてインド産業発達史に記憶されるところである。ここは一八世紀ごろまで中東と中国を結ぶ東西通商ルートの要衝、タール砂漠の「駱駝市」が繁栄を極めた地域である。今もその名残の「市」が開かれるという。マールワリ商人 (Marwaris) の祖先達はここで財を成し、イギリス東インド会社のインド進出にともない、次第にボンベイやカルカタに居住の場を移した。一九世紀初頭には金融資本家として財閥の地位を確立する。故郷を離れた財閥家族、兄弟達は成功の証として故郷に「錦」を飾ったのである。それは寺院の建立、豪華な館 (Haveli) の建設、学校の建設、公共用の井戸など、こぞって故郷の村々に寄贈した【写真番号 03-020】。ここにみるラージャスターンは満身を原色豊かなサリーと数々の銀製装飾品を身にまと

う農婦達との遭遇がある。農作業に励む一団がある。ここは、近くまで忍び寄る工業化の波とはまだ無縁のようにみえる。彼女らは迫りつつある社会変化の鼓動をどのように感じているのだろうか。

二つ目のルートは、アーグラ (Agra) から西方向へ一直線に延びる国道、農業地帯を走り抜ける十数時間のドライブ (約二四〇キロ)。州境に近く、原色のサリー姿の農婦達を見たとき、瞬時にラージャスターンの風を感じる。州境のチェックポストを過ぎた瞬間である。この道はその昔、藩王国の時代、ジャイプルの工芸品、宝石や木綿製品、モスリンなどがアーグラなどの王宮に運ばれていった歴史のある街道でもある。その産品を作る子ども達を探すジャイプルへの道でもある。目的地、ジャイプル市はラージャスターン地域の誇る工芸品の一大ショーウインドの感がある。高級な宝石の宝飾品、ペルシャ系統カーペット、伝統的な木版プリント染めなど、すべて外貨稼ぎの主役である。もちろん、安価な日常生活用の産品は町中の市場にあふれる。二回にわたる試行錯誤の調査はほとんどが地元研究者と通訳を介しての観察と聞き取り調査であった。資料やデータの乏しい困難な調査、なによりも児童労働を生産の現場に見つけることが困難なフィールドワークである。事例調査の対象として集中的に取りあげた三つの産地と伝統工芸品は、(1) シェカワティ地

域のサモッド、シカール、ラタンガル各町村に広がる銀製宝飾品類、(2) 同じくチュール県一帯、とくにラタンガル農村部とジャイプル市郊外農村部のカーペット、そして、(3) ジャイプル市郊外サンガネール町の木版プリント染織である。これらが世界市場と結ばれる産地と産物である。

ところで、「伝統工芸品」とはどのように定義されているかを簡単にのべておきたい。地域社会の構成やそこに生きる工人(クラフト職人 *Craftsman*)、さらには、工芸品の特徴からおよそ三種類の類型があるという。²⁾

① 特定の地域性をもつ工芸品

地域信仰の祭りや村の祝祭行事に使われるもの、たとえば *Deepavali*, *Bihu*, *Durga Pooja* (西ベンガル) などがある。祭りの衣装(縫製職人)、装飾品(ジュエリー細工職人)、女神などのご神体(木彫り・石彫り・粘土職人など)がカーストを異にする職人達の共同作業で作られる。現地調査の対象としたスターリング・シルバー宝飾品の数々はシェカワティ地域を構成する多くの部族社会とカースト階層から構成された異民族融合の産物である。

②巡礼地に発達した宗教性の高い工芸品

寺院や信仰祭事あるいは巡礼者の着衣・装身具などがある。たとえば、ラージャスターンアジメル・シャリフ (*Ajmer Sharif*) はモスリム (イスラーム教徒) の巡礼地であり、また、近接するグジャラート州のハジ・ピル・メラ (*Haji Pir Mela*) は宗派を問わない一大巡礼地として有名であり、毎年参拝に訪れる膨大な人員の巡礼者に民芸品を提供する。また、ヒンドゥー教の聖地ヴァーラーナシ (元ベナレス) では巡礼者向けの法事用織布、装身具、宗教関連の工芸品など一大産地を形成している。調査対象の地域としては往時のラジプターナ藩王国中心地ジャイプル地域にその起源をもつ染織と染織品である。とくに宗教儀式に用いられる天蓋、掛布などがそうである。

③特定のカーストに属する工人で、特定技巧・技能の専門家による市販用の工芸品

長期間の見習い過程を経て徒弟制度のもとに工人の地位を得る。たとえば、*Tulsham* または、*Vankar* (織物職人)、*Rangrez* (染物職人)、*Khatri* (印刷職人)、*Sonar* (鍛冶職人) など、さらには、それぞれがサブ・カーストにわかれ、それぞれが異なる工具と技法を使う。調査対象の地域としては広く、シェカワティ一帯、産物はとくに、伝統的インドカーペツ

トとして分類される二種類、手織りカーペットおよび手織りウール・ドゥーリーがある。

三 スターリング・シルバー宝飾品の産地

この地域一帯には数々の銀製宝飾品を作る仕事場（工房）が存在する。銀の含有量九二・五%以上のスターリング・シルバー製品を産する広域産地である。精巧な技と伝統のデザインで有名なラタンガル (*Ratangarh*) という小都市がある。デリーから南下し間もなく、州境を越えると右手に広がる広大な、シェイカワティと呼ばれる三角地帯がタール砂漠に向けて展開する。前述した通りかつてジャイプル藩（王国）に仕えた家臣団「シェイク」の治める地の広域呼称である。サモッド (*Samode*)、シカール (*Sikar*)、ジュンジュヌウ (*Jhunjhunu*)、マングワ (*Mandawa*) などすべて小領主の城下町、いずれの町にも銀製品の工房が無数にある。地元出身の旅行作家T・パンディ女史 (*Tripi Pandey*) はこの地域一帯でつくられる銀製装身具の数々を収集し、つぎのように紹介している。

Kanta (Nose ring 鼻輪)

Bazuband (Armlet 腕輪)



写真：グジャラート州境近くの農村にて

撮影：筆者【写真番号：03_034】

- Bazu chud (A long armlet 腕輪)
- Pahaunchi (Beaded wristlet ユーズ製腕輪)
- Kada (A pair of heavy and thick bangle バン
グルー対)
- Bangadi (Two part hinged bracelet プレスレッ
ト二箇所留め)
- Muthia (Cuffs カフス)
- Hathphool (Hand ornament for back of the
hand with rings for fingers and thumb) 手首
の装飾 (親指と薬指二個の宝石指輪を手首
に回したチェーンで結ぶ装飾)
- Binti (Ring 指輪)
- Bel (Spiral ring スパイラル指輪)
- Kankati/Tagadi (Waist band ウエスト
用バンド)

Kada (Two part anklets アンクレット二箇所留め)

Kadi (Fitting rigid anklets アンクレット固定型)

Pazeb (Flexible silver chain anklets アンクレット銀製チェーン留め)

Bichuda (Toe rings 足指用リング)

1 村の鍛冶屋と職人

作業小屋は村の鍛冶職人(工人)一人と簡単な工具一式だけの簡素な村の工房である。ここが村の女性を飾る数々の宝飾を生み出す舞台である。城下町に長い年月を経て根づいた銀細工製法は変わることがないという。これら鍛冶職人は自分の属するカースト階層の顧客のみを対象とし、そのコミュニティーに伝承するデザイン、装飾の形式、さらには原料の種類、とくに銀含有量などを忠実に守る。原材料は顧客農民が持ち込む再生品や、古くは英領インドで流通した銀貨などが使われる。一九世紀後半にインドで鑄造された銀貨一枚の値段交渉の場面をみた。婦人客は腕輪ペアを作るに十分な値打ちだと主張を変えることなく延々と交渉が続いていた。印象に残る光景のひとつである。



写真：村同郷カーストの婦人装身具（バングル）をつくる鍛冶職人
場所：ラージャスターン州シカール村
撮影：筆者【写真番号：03.007】

ところで、鍛冶職人の後ろには隠れるようにして作業の手伝いをする子どもの姿があった。職人の手がとまったころ聞き取りの質問をはじめた。子どもは職人見習いとして同郷の、同じカーストに属する知人からあずかり、原材料の仕分けや搬出・入、さらには素材段階の銀製品の化学処理、成分分解・計量などの作業を割り当てているという。年齢は答えない。同行の現地通訳はおよそ一二歳前後、就学の形跡はない、という。この形態の不就学児童労働は決して珍しくない、広く一般化した現象という。銀製装飾品への執着は単に女性美の追求という審美的趣向だけにとどまらない。社会の不安定や騒擾・混乱の歴史が生み出した自

己防衛のための貯蓄形態でもある。あらゆる貯蓄性のある資産はすべて装飾品として身にまとうという乱世の時代の知恵であろう。鍛冶職人との間で交わされた銀貨一枚の値踏み交渉の激しさに銀製装身具に隠された貯蓄の姿を見る思いがあつた。

以上の観察はいくつかの城下町にみる工房におおむね共通する点である。およそ二つの共通点がある。一つは、村々の銀製品を支える需要構造にはカースト階層に固有の伝統としきたりが堅くまもられている事実があること。そして、二つは、生産のシステムは同じように同一のカースト所屬という枠のもと、職人と見習いの子どもはいわば徒弟関係のかたちを作り上げてきたという事実である。そして、その徒弟関係は農村貧困の実態を考慮すればまさに、債務労働の実態を反映するものと考えてよい。工人 (*sunar*) は鍛冶職人であり、商人 (質屋)、さらには金貸し業も営む村の名士ですらある。村の子ども達が債務労働に追い込まれる一つの有力なチャンネルはこのような伝統的なギルド組織によることが多い。債務労働を長期にわたり固定化するメカニズムと言つても過言ではないであろう。この地方の村々にはこのような、技能継承と債務労働という二重の仕組みが制度化された社会が広がる。

さらに調査はシェイカワティ地域の内陸部にある小さな城下町ラタンガルに向かう。ター



写真：ラタンガル・アンクレット (Anklets from Ratangarh)

銀含有量 92.5 %

提供：Exotic India 社

ル砂漠の外延部に位置する砂埃の舞う国道沿いの小都市である。歴史は一八世紀にさかのぼる。サンスクリット研究の中心地という。タール砂漠は指呼の距離にあり、インド初の核実験が行なわれたポカラン (Pokaran) へつながる砂漠道がある。町の工房はやや規模の大きい、工芸作品を制作しているような構えをもつ。デリー在住のある工房作家の紹介をえて目的の工房を訪ねた。ラタンガルの銀製品はすでに述べたように高品質の宝石装飾品ばかりである。以前にみた村の鍛冶職人が作る銀製品は農村の日常生活用品である。しかし、ラタンガルの製品は、きわめて工芸価値の高い世界商品と評価される銀製のジュエリーばかりである。名品の一つ、ラタンガル・アンクレットの製作に要する日数は五十日という。この銀製品の傑作を手にとるたびに砂漠の町に今も脈々と受け継がれる伝統の技、それを支える銀職人と子どもの顔がよみがえる。

2 宝飾品製作過程と技能継承——砂塵の舞う村々に見る

親から子へ、親方から弟子へと工芸品製作の技能、技法は仕事場での実践を通じて行われる。どの作業現場にも成人の工人（職人）と子どもの見習いや補助人がいる。もちろん、不就学の子ども達である。徒弟制度のもとでの技能移転はどのように行われるのか、特定の工芸品を選び、その製作過程を構成するいくつかの技法（技能・熟練）を判別する。そして、その担い手・工人の社会的属性（カースト）など、技能移転の結節点を探るフィールドワークである。以下に、「未熟練労働」の子どもがそれぞれの技法に特有の一連の製作過程のなかでどのような個別作業を担うことが可能かを観察した結果を記す。

(i) ミーナカリ (*Meenakari*)、または、エナメル焼付け技法（バングル、ネックレスなど）
 一六世紀ムガル帝国時代、ラホール (*Lahore*)、パキスタンの古都）からエナメル職人を呼び寄せ、当時の最高技法をジャイプルに定着させたという由来がある。主な産地は *Jaipur*、*Bikaner*、*Udaipur*、*Jodhpur* などラージャスタン南西部の王国都市である。一八八四年ごろの木版画にはエナメル工房の様子が描かれている (*Rajasthan: Every Man Guides, London*)。



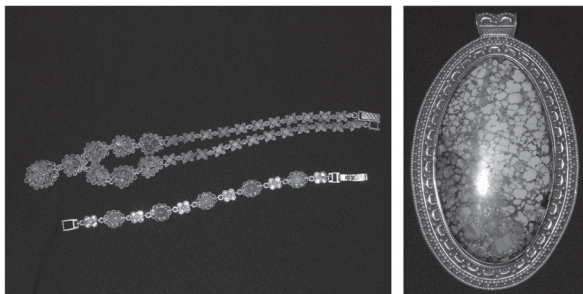
写真：ミーナカリバングル。エメラルド、ダイヤモンド、トルコ石など原石の採掘・加工・研磨には子ども達の労働が欠かせない。

提供：Exotic India 社

三人の若い見習い職人が宝飾品の型を作り、装飾の絵柄を彫りこみ、エナメルを絵付けする。親方工人（老人）はこれを土窯（キルン Dharti）の火のなかで注意深く焼きをいれる。今も変わらない製法である。若い見習い職人はそれぞれの技法、すなわち、成型・絵柄の彫り込み、絵付けなどの個別技法を習得し、そして一定期間をへて全体のシステム技法を会得することになる。

(ii)クンドウカリ (Kundkari)、または石（宝石）彫り技法（指輪など宝石加工品など）

ラージャスターン特産の宝石、希少石、たとえば、ヒスイ、ルビー、エメラルド、トパス、また、アフガニスタン北西部特産のラピス・ラズリ、チベットのトルコ石などに細密な彫りをほどこし、これを金やダイヤなどの枠組みに埋め込む。ラージャスターン独特の技法という。子ども達や若い見習い職人は宝石の原石を選別・裁断する作業にあたる。熟練度の高い子どもはつぎのプロセス、研磨と成型の作業に移る。ここにも技法習得の長い



写真：エメラルドネックレス（左）トルコ石ペンダント（右）
提供：筆者 個人蔵

プロセスと厳しい作業環境がある。

(iii) スターリング・シルバーの純度規格（アンクレット、バンゲル、ブレスレットなど宝石装身具）

銀含有量九二・五%基準を確保するために銀職人（鍛冶）は同業組合（ギルド）の定める厳しいルールを守らねばならない。また、自らの銀職人としての自負と誇りがある。本文に記したように銀素材は中古品やリサイクル品などが多く使われる。それらの選別・計量・化学処理の作業は子ども達の作業となる。同郷の同一階層の子ども達が働くことになる。たとえば、ある指定トライブ、*Barner, Bhiwara, Alwar* 地域の *Meo* 族の装身具はどれも際立ったデザインと型に特徴がある。アルワー (*Alwar*) 出身の鍛冶職人の仕事場では若い見習いも、雑役の子どももすべて同郷の出身者で占める。

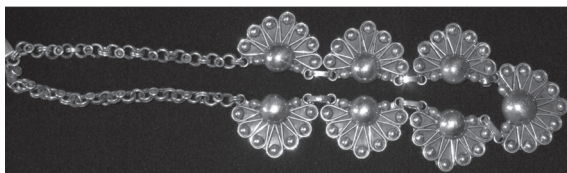


写真：ラタンガル指輪付プレスレット（銀含有量 92.5% Sterling Silver）40 g。指輪（薬指）とプレスレットを銀製チェーンで結ぶ銀線状細工（すかし細工）。奴隷のように結ばれたプレスレット（Slave bracelet）とも呼ぶ。

提供：Exotic India 社

るまで、いろいろな形態、意匠、品質がある。これほどドラマをつくりあげ、また、宗教的意味、つまり「靈性」を付され女性の憧れの対象になった装身具はほかにない。アンクレットにまつわるタミル叙事詩「シラツパディハーラムーアンクレット物語」（訳注 彦坂周、きこ書房、二〇〇三）は読者を悠久の世界に誘う。また、ある解説書はつぎのように述べている。「そもそも足は身体全体を支える人の台座だから、母なる大地に直接接し、その強烈な香気から立ち昇る「生氣」を吸い取るのである。逆説的かというと、インドの伝統で

また、顧客は自身と同一の指定部族である。これはスターリング・シルバー精製の技法が同一の部族社会のなかで世代間に伝承されることを意味する。ところで、ラージャスターン地方にはわが国ではあまり馴染みのない、多くの宝飾品を見ることがができる。そのひとつにスターリング・シルバー製のアンクレットがある。藩王国時代、王侯貴族の婦人が身につけた工芸美術品クラスのものから、一般庶民の日常品にいた



写真：スターリング・シルバーネックレス。製作年代は 1900 年ごろ、ラタンガル地方のもの（鑑定）という。

提供：筆者 個人蔵

は足は身体のなかで最も卑しいもの、不潔なもの、そして汚らわしいものとされる。だからこそ、自己のエゴを投げ捨て高徳、高齡の人に尊崇の念を表すために相手の足にひれふすのである。古来、詩歌や演劇のなかでアंकレットは愛の表現、つまり、相手への「服従」を示す象徴となった」と (“Women and Jewelry: the Spiritual Dimensions of Ornamentation”, Exotic India, March 2002 より抜粋・引用)。

また、アーム・バンド (Baajiband) は普通、肘から肩までの一帯を金・銀・象牙などをあしらった「腕飾り・Armlets」で飾る。ラージヤスターンの農村婦人に多くみられ、所属する部族、社会集団、地域、そして既婚・未婚の別によってアーム・バンド (腕帯) の数が異なる。そのほか、ティカ (Tika) と呼ばれる額の上部を飾る宝石は銀鎖の片方を髪にとめるフックが、そしてその反対側がペンダントに結ばれたデザインである。この宝石を額につけると「人の秩序を守る」霊気 (chakra) が宿るとさ

れる。このように、「インド女性の装飾品はすべてに靈性が宿る」（前掲論文）と解釈され、古代より詩人や絵師などが女性に固有の理想的な美しさと神秘性を宝石装飾に表現したという。女性の身体的特徴を現す、すべて頭から爪先にいたる部分を比喩的、あるいは形而上的、また音感的効果を持たせる装飾こそ「美しい」と考えたのである。インド全国のうちでも、とくに、ラージャスターンはこのような宝飾の靈性を感じさせる土地なのである。そこには伝統をかたくに守る宝飾職人とその子ども達がいる。

藩王国の時代に培われた伝統の意匠（デザイン）がある。繊細な美の追求が絶対視された。製作の技法はますます洗練され、作品は美術品の域に至る。職人のほとんどが地元出身である。そして彼ら一人ひとりに子ども数人が補助的な作業要員として配置されている。ここにもまた、児童労働の世界がある。銀含有量九二・五%のスターリング・シルバーで作られた数々の工芸作品は確かに女性の美を追求しようとする人々の欲望を満たすに十分であろう。商業的に見ても世界市場の要求に応えうる価値を持つにちがいない。外貨稼ぎの有望な輸出品目である。しかしながら、タール砂漠の砂塵にまみれて黙々と働き続ける子ども達からはわたくしの問いかけに「学校に行きたい」と懇請にも似た声が返ってくる。今、このタール砂漠に立ち「風土」という言葉の意味が理解できるような気がする。タール砂



写真：カーペット村の風景

提供：ジャイプール・ラグズ基金 (Jaipur Rugs Foundation, Jaipur, Rajasthan)

漠の民、ラージプート族、戦士の階層に属する末裔が暮らす社会がある。厳しい自然と民族興亡の歴史が生み出した文化の風土を感じる。また子どもは、大人と同じように伝統を守り、技能を継承していくものだとする「子ども観」が支配的であるように思える。そこにはしつかりとした歴史と伝統の刻印、ギルド制度の存在がある。そして容易には変わることのない社会慣習カースト制度にささえられた工人（職人）や技法・技能の分業という棲み分けがある。

シェイカワティの城下町一帯には制服姿の子どもを見かけることはない【写真番号03.001, 03.003~006】。ただ暗い仕事場の奥に黙々と労働に励む子どもだけを見た。そ

の姿は彼らの作品、銀製装身具の輝きとくらべ、なんと対照的なことか。複雑な思いでつぎの目的地ジャイプルへの道を急ぐ。途中、定宿サモツド・パレス（七四頁写真）を基点にして周囲約二〇キロ範囲の村五カ所を調査することとなる。そこかしこの農村部の奥深くにカーペット織りの村々を見た。

四 カーペット織りの村々——サモツド県とチュールー県

地域一帯はほとんどが農業に適さない不毛の半乾燥地帯である。灌漑施設が設けられた農地だけは緑あふれる穀類の畑を見ることができ。しかし、タール砂漠地帯に近づくにつれ雑木の点在する茶褐色の乾燥地にかわる。農民の大部分は土地を所有していない、いわゆる土地なし農民である。生計は小規模の牧畜に依存しておりほかに収入の道はほとんどない。成人の労働の機会は乏しく、都市への流出が進行する。この一帯はまた、多くの部族社会から構成され、封建時代そのものの社会秩序を残存する地域である。独立後の政府の諸施策にもかかわらず、経済や教育の機会に参加し、生活上の恩恵にあずかることができない巨大な農村人口の存在がある。

ラージャスターン全土の初等教育の現状を俯瞰すると、初等教育の質・量にわたってきわめて劣悪な状況にあることがわかる。日本の人口の約半分、五六五〇万人（二〇〇五年推定人口）の人口規模をもつ広大な地域である。そこには、二つの村で小学校（クラス）一校のみ、生徒数は一校あたり平均七九人に過ぎない、教育過疎の社会が広がる。人口構成は〇歳／六歳人口、一八・八五％、州人口の約三割がいわゆる後進部族社会という。すなわち、指定カースト一七・七％、指定トライブ（種族）一二・六〇％の構成となる。識字率は平均六〇・四％、内訳は男子七六・七％、女子四三・九％。教育機会へのアクセスは絶望的な状態といわざるを得ない。最新の就学統計（State Elementary Education Report Card: 2005）から「学業放棄」率を推計すると、小学校一年（クラスI）から二年（クラスII）への進級率は七三・三％、女子の場合七四・五％。また、驚くことに五年（クラスV）終了時には四九・二％、女子は五四・一％、全国でもっとも「学業放棄」率が高い地域である。これに未就学人口を加えるといわゆる「不就学」の子どもはおよそ、一五〇万人を下回らない規模と推定される。いろいろな形態の児童労働と考えるとよい（二〇〇五年次人口推計値と就学統計から筆者推定³）。

このような劣悪な教育環境は州政府が農村人口の生活向上の対策として自宅での機織り、

カーペット生産を奨励するようになった結果、いつそう深刻なものとなった。不就学児童はカーペット織りにとって欠かすことのできない労働力となった。カーペット振興のために設立された財団、「ジャイプール・ラグズ基金」（一九五九年認可法人）の年次報告（二〇〇七〜〇八）はこれらの地域に広がる貧困や失業の現状をつぎのように述べている。

「独立後六〇年を経過しても今なお、インドには奴隷状態や不平等、不公正にくぎ付けにされた社会階層がある。農村経済もいまだ、いくつかの社会階層に分断されている。ジェンダー、カースト、信条、身分などによる差別が依然としてはびこる」と。そして、つぎの三つの問題を指摘している。

① 指定カースト、指定トライブ（部族）、最下層民などのコミュニティの存在——かれらの文化や伝統を守るといふ名目のもとで現状を維持し、社会の進歩や変化から隔絶する。したがって、社会的抑圧や偏見があり、雇用や教育の機会から排除される。

② 女性と子どもの抑圧——女子の社会的隔離、基礎教育を受ける機会を認めない社会慣習や精神風土が根強く残る。

③ 若年者（一五〜三〇歳）の都市出稼ぎ移住と労働仲介人、金融仲介人による搾取、など。ところで、これら経済的・社会的な「限界農民」の窮乏を救済する手段としてカーペッ



写真：カーペット村機織の農家
提供：ジャイプール・ラグズ基金

ト織を奨励する動きが注目され始めた。一九九〇年代後半、貿易自由化の動きにともない伝統的インドカーペット、とくに手織ウールドゥーリーや手織カーペットの輸出需要が旺盛になってきたことがその背景にある。これらカーペット類の生産が奨励され、地域一帯の貧困農村部の、とくに社会的限界農民の救済・支援の有効な手段としてカーペットが注目された。自営カーペット職人の育成や自立のための金融的・技術的支援が講じられ、村々のいたるところに機織り作業所が生まれた。ところが貧困撲滅の道とみられた自営カーペット織りの奨励はむしろ、子ども達を学校よりは自宅に設えた

カーペット機はた機に向かわせることになる。皮肉にも、貧困撲滅のための運動が不学児童をむしろ増大していく結果となる。調査対象のサモッド県内農村の事例である。ところで、さきに述べたジャイプール・ラグズ基金は州内はもとより、インド各地で自営カーペット職人の育成・自立のための支援を展開しており、その活動理念には注目すべきものがある。カーペット生産に不可分の関係と考えられた児童労働を拒否するという立場を明確にし、貧困撲滅の唯一の道は自営カーペット職人の自立にあること、そして真の企業家精神醸成の成人教育と訓練を活動プログラムとして組織化していることである。そして、同時に子どもに初等教育の機会を提供するという複線的アプローチを試行していることに注目したい。活動の舞台、シェカワティ地域はインド財閥の巨人、マールワリ財閥を生み出した地である。そこには企業家精神を生み出す社会環境がある。

わたくしの現地調査はこの輸出ブームを謳歌する時期、地域はシェイカワティ地域の東部サモッド県、そして同じく北西部のはずれ、チュールー県のいくつかの村々が対象であった。前者の村々は一部灌漑農業（井戸水のポンプ汲み上げによる）、後者はタール砂漠に近接する典型的な乾燥地帯である。それぞれの社会構成はほぼ同じように村人口の三〇〜四〇%がいわゆる経済的・社会的限界農家群からなる後進地域とってよい。サモッド県カー

ペット織りの村の事例をみる。農民は職能組合組織に入り、低利融資を受け、技術研修を受けて、自分の織り機を所有することになる。そして、在宅の自営カーペット職人として認知され、ジャイプル市に拠点をおく大小の輸出会社の下請け「家内工業の一生産単位」となる。原料のウール染め糸は仲介人を通じて供給される。図面、デザインなど厳格な規格が要求される。製作途中しばしば、作業方法について監理・監督の制約を受けることになる。製品が完成すると最終工程の確認が行なわれ仲介人に納入する。下請け仕事の仲介人は多くの場合、村々に横断的な人的ネットワーク・ワークをもつ金融仲介人であり、貸金業者でもある。これらの村々に古くから存在した。かつては困窮農民を債務労働に追いやり、今は、新たな生産・輸出という組織化された流通システムのなかにまで入りこんでいる。

このように村々のカーペット織りが奨励・導入され、農民達は生活の糧を得ることになるが、その子ども達もまたその新たな家内工業に補助労働者として組み込まれる。不就学児童の姿は村の機織り機の周囲にある。カーペット織の工程が生み出す「雑用」の数々がある。自宅に運び込まれた、その時点から原料系梱包の開梱、用途順の分類・整理、機織り機周囲の整頓、単純な織りの作業、など、生産の全工程が終了するまでに発生する雑用の処理はすべて子どもの役目である。農家の土間に置かれた機織り機の一つ、図面を横に

一心不乱に機を織る年長の女兒の姿を見た。子どもは家内労働の重要な役割をはたしている。もちろん、不就学の子どもの姿ばかりである。

五 生産工程と子ども達の労働

伝統的インドカーペットとはどのようなものか。ジャイプール・ラグズ基金の資料『Carpet History』は、「伝統的インドカーペット」をつぎのように説明している。インドカーペットはペルシャカーペットの影響をうけ、非常に美しい模様や色使いを生み出し、独特の発展を遂げた。典型的なペルシャカーペットは一三世紀から一四世紀の間にインドに持ち込まれ、王室用の工芸品としてとりあつかわれた。主にカシミール地方、ラージャスターン州、さらにウッタール・プラデーシ州の一部でこうしたカーペットは発展した。伝統的インドカーペットは「ドゥーリー (durrries)」と呼ばれ、トルコの「キリム (kilims)」と呼ばれるカーペットによく似ている。それらはウールや綿を使って織られたフラット・カーペット、幾何学模様、花模様、伝統的なくくり染めを用いて作られる。これらは一応、つぎのように分類されるのが定説といわれる。

(i) 手織りカーペット (Hand knotted carpets)

(ii) 手織りウール・ドゥーリー (Handmade woollen dhurries)

(iii) ピュアー・シルク・カーペット (Pure silk carpets)

(iv) その他、合成カーペットや円形カーペットなど

また、農村地帯に広く分散し、都市部に会社本社機能を持つ産地が全土に形勢されている。地域分布としては、つぎのようにほぼ北部インドに集中する。

(i) ウツタル・プラデシ州——バードイ (Bhadohi)、ミルザプル (Mirzapur)、カーマリア (Khamaria)、ゴーシヤ (Ghosia)、ワーラーナシー (Varanasi)、アーグラ (Agra)

(ii) パンジャブ州——アムリツタル (Amritsar)、パタンナーコット (Patankot)

(iii) ラージヤスターン州——ジャイプル (Jaipur)

カーペット模様も地域ごとに大きな特徴がみられる。およそ、三つのタイプがある。

(i) ウツタル・プラデシ州——仏教とチベット地方の影響を受ける

(ii) パンジャブ州——幾何学模様と花模様が混合された模様

(iii) ラージヤスターン州——ペルシャ・トルコのスタイルに地域の特色を加えたもの



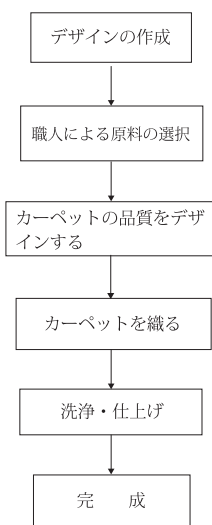
写真：バードイ産カーペット
サイズ：177×250 cm
提供：筆者個人蔵

ほど品質は高く評価される。0-80 Kpsi——低級、120-330 Kpsi——中級から上級、330 Kpsi以上——上級、400 Kpsi以上——最上級、とそれぞれ品質規格が決められている。⁴⁾

また、カーペットの品質を決めるものは、縦糸と横糸の結び目、ノットの数によって評価される。計測の単位は一インチ四方(約二・五センチ)のノット数(Kpsi)。多くなる

農村部のカーペット生産は農家の家族が主たる生産単位となる。カーペット職人とその

図1.
カーペット製作過程
(デザインから完成まで)



伝統的にカーペットのデザインに使われるデザイン画は手書きで作られるため、色使いなどは完全に職人の創造性に左右される。デザイン画は白紙の上に既存のデザインと重複しないように色をつけて作られる。作られたデザイン画は職人が作業をより正確に行えるように方眼が入ったグラフ用紙に転載される。そうしたデザイン画の作成にはデザインの大きさにもよるが、たいてい二〇〜二五日を要する。その後の製作過程はつぎの図の通り。

六 カーペットの製作過程



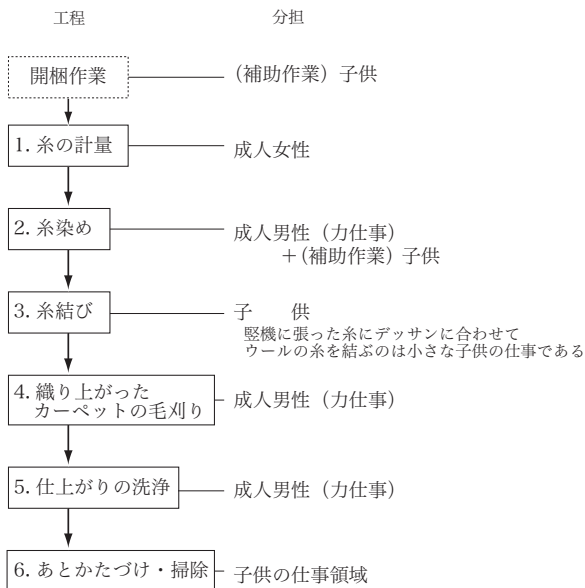
写真：カーペット織りの少女
提供：ジャイプル・ラグズ基金

浄・天日乾燥をもって完成する。一方、都市部、なかならずジャイプル市からサンガネール地区に広がる昔からのカーペット生産者は糸くりから全工程を一貫して行う方法をとっている。『インド染織の旅』（源流社、一九八八）の著者安藤武子氏は市内最大のカーペット工場で観察した生産工程の全体システムを次のような図で説明している（同書五二〜五三頁）。これは工程別に見た成人熟練工と未熟練の子どもの分業図とも読み取ることができ、このフローチャートに「糸の計量」の前段階にある「開梱作業」と工程2「糸染め」に見られた多くの子どもたちの作業配置はわたくしの観察によるものである。

家族が全工程の一部分ではあるが、要である上記④「織り」の部分を担当することになる。素材の原料糸は大概の場合カーペット発注元の業者が手配し、あらかじめ決められたデザインにもとづいて手配される。また、「織り」の段階を終えた半加工カーペットは納入先に運ばれ「毛がり」と呼ばれる表面の糸を調製する最終工程が行われる。洗

第3章 タール砂漠の児童労働

図2. カーペット生産工程



安藤武子著『インド染織の旅』(源流社、1988、pp. 52-53)を元に筆者作成

こうしてみると、生産工程のなかでもっとも重要で、労働投入が大部分を占める③「糸結び」の工程が子どもの器用な手によって成り立っていることがわかる。これを人・時間の投入量、または、生産性の分析をするまでもなく子どもの低賃金労働がカーペットの低コストを支えていることが明白である。その背景理由のもう一つに子

どもの作業を成人に置き換えることが技術的に不可能といえないまでも、望ましくないと、という作業能率上の制約がある。一部の個別技術の置き換え、ないし代替性の困難な主要作業工程のあることがわかる。子どもの労働はこのような技術制約あるいは技術規律との関係を含む生産組織の問題でもある。本章で取り上げる伝統工芸品に関わる児童労働を考える場合、このような生産組織の観点を抜きにしてその全容を理解することはできない。

七 児童労働不使用宣言「ラグ・マーク」

ラグ・マークとは「本製品は非合法の児童労働を使用していない」と証明するためにカーペット完成品に縫い付けられるロゴである。縫い付けはカーペット織り工女の働く農家の自宅ではない。製品納入先の集荷工場がそのように認証するのである。

そして、主要消費国欧米の消費者はそのカーペットにラグ・マークを見て、「児童労働問題」が解決された、と安堵するのである。しかし、カーペット村の奥深く農家の庭先に据えられた織機から子どもの姿は消えることはない。

インドの欧米向け輸出品カーペットが低賃金労働、とりわけ児童労働によってその市場が



ラグ・マーク

拡大しつつあることに懸念と批判が向けられたのは九〇年代初めである。WTO憲章に児童労働の禁止を要求する「社会条項」をめぐるアメリカやEUと、インドその他の途上国が対立した。欧米輸入国の狙いはインドの労働力人口に参入する四千万人とも一億一千万人とも推計される膨大な規模の児童労働の存在に世界の注目を集めることにある。もつとも、この最小・最大の児童労働数の根拠は明らかではない。この国際交渉上の政治的演出によってインドの不正な労働慣行を糾弾することに成功したのである。一方、インドは対案としてひとつの「認証制度」——「手織り絨毯の製造過程では非合法の児童労働は使用していない」ことを証明するロゴ (Rug Mark) を製品に付し輸入国消費者に購買の選択肢をあたえる方法——を取り入れることにした。児童労働によって生産されたカーペットを購入するか否かは輸入国消費者の判断にゆだねられることになる。一方、生産者やさまざまな仲介業者、そして輸出業者にはカーペット一枚ごとに「社会的責任のラベル」ロゴをつけることを求める。一九九四年、「インド・ドイツ輸出振興プログラム」(The Indo-German Export Promotion Program)、「南アジア児童労働NGO連合組織」(The South Asian Coalition on Child Servitude)、『KUNICEFやカーペット輸出業者からなるThe

Rugmark Foundation が設立され、輸出国と輸入国に一定の規制をかける認証制度を開始した。この制度の限界や問題点があきらかにされるまであまり時間を要しなかった。一九九六年、インド有力紙 *Times of India* の署名入り論説は早々につきの二点をあげている。すなわち、(1) カーペット生産から児童労働を排除しても、関連業種たとえば繊維業への労働転換が行われるだけで全体の(児童)労働者の規模に変化はない。(2) 子ども達は低価格の製品に、また成人は高価格・高級品に特化して生産・市場の二重構造が進行する。児童労働の根絶という観点からこの認証制度に大きく期待を持つことはできない、という(“Curbing Child Labor: Rugmark Label on the Mat”, by Arvind Panagariya, in *Times of India*, November 14, 1996 および *Institute for Human Development*, 2000, *Impact of Social Labelling on India's Carpet Industry*, ILO-IPEC Working Paper)。

不就学の子どもを生産の現場から排除するという方法では根本的な問題解決とはならないことは早くから指摘されていた。ただし、この認証制度によってグローバル化した世界経済のなか、児童労働の存在があらためて認識された意味は大きい。この国際的認証制度と平行して同様の趣旨をもつインド独自の認証ラベル (*Kaleen*) が法律によって設けられた。対象となるのは工場(作業所)と雇用関係のもとに働く一四歳以下の児童労働であり、

在宅家内労働は親子間の技能伝承の必要から除外してある。しかし、子どもの不就学の問題は依然として解決されることはない。

八 伝統染織の村サンガネール

州都ジャイプルの郊外サンガネール (Sanganer) は長い歴史に培われた特異な染織技法、(i)木版捺染法 (サリー、ベッド・カバー、テーブルクロス、掛布など) と(ii)防染法——タイ・アンド・ダイ—— (ターバン、サリー、掛布、その他服飾用布地など) の発祥の地として知れる。また、これらの製作技法を使った伝統的染織品の産地として有名なところである。日本ではインド更紗さらさや緋かすりなどの染織品は戦前から第二次大戦後しばらくの間、日常生活のなかで広く使われていた。その名は「ジャワ更紗」とも呼ばれ、ある種の郷愁感をもって今も人々の記憶のなかに生き続けている。日本の三大緋といわれる、久留米緋 (福岡県久留米市とその周辺地域)、伊予緋 (愛媛県松山市)、備後緋 (広島県福山市) 産地は戦後の急激な社会変動の結果、人々の生活様式や消費行動にも大きな影響を及ぼし、これらの生産と消費は激減することになった。明治以降にいくつかの産地に開花した、日本独特の製造技術、



写真：ベッドシートのサンガネール文様 サイズ75×57.6 cm
提供：個人蔵 Exotic India社

染織技術は指定伝統工芸品を生み出し、日本が誇る装飾文化、工芸美術の世界を創造した。

ところが、これらが、幾千年の昔、生まれ育った故郷がインド北西部の地にあつたことを知る人はあまり多くはない。その大地とはタール砂漠に近いサンガネール。インドの更紗、絞^{しぼ}り、緋はそれぞれが独自の民族、部族の文化背景を持つインドの大地が生み出した歴史的産物である。素材も木綿、絹、ウールなど自然の恵みは地域ごと、土地ごとに異なる。草木の種類が異なれば染料も異なる。大地や空の色が違えば布地の色も異なる。すべて大地の恵みを鏡のように映し出した、

色彩、形状、文様、素材、用途も異なるのがインドの染織であり染織品である。そこで、日本で知られる、いわゆる「インド更紗」製作技法の源流、その故郷のひとつジャイプル近郊のサンガネールを訪ね、今に生きるブロック・プリンティングと呼ばれる技法とその作品をとりあげる。ベッドカバー、婦人用衣料など伝統的デザイン（文様）の染織品を生産している地域である。ラージャスターンには広範囲にわたり、数多くの「カーペットの村」があるように、州都ジャイプルの近郊にも「更紗の村・ブロック・プリントの村」がある。より正確には染織職人の一大集落がサンガネールである。そこは「芸術的、技術的には更紗におけるインドの首都ともいえる」（一九〇三年デリー展覧会公式カタログ Watt George 著 *Indian Art at Delhi, 1903* の叙述。既出「スイスバール民族学博物館所蔵インドの染織」日本語版二六四ページ）と、百年前にサンガネールについて書かれた文章がある。

「（サンガネールは）今日でも重要な中心地である。ここで製作される意匠は、規則的に散りばめられた見事な花や花束文で、ある種の織物に見られるブチ（buti）とよばれるものに似ている（図版一三〜一六参照）。

花文様は写実的で、先端がすこし傾き、全体としては毬果状である。地色は

普通、白あるいはクリーム色であるが、黄、青、濃緑色なども用いられる。洗練された防染法や媒染法が組み合わされ、…そして最高五、六種の木版を使い、緻密で複雑な文様を表すのである。最も古いものとしては、一八世紀末の作品が知られているが、それ以前に存在したことは一七〇一八世紀のムガル帝国時代の細密画からもうかがわれる」（引用は同上文獻に同じ。太字は筆者の強調。）

この叙述からサンガネール更紗の特徴は意匠、文様、地色、などにおいて南西に隣接するグジャラート地方のそれらとも異なる。「木版押捺媒染」という技法が加わることによつて見事な作品を生み出すことがわかる。わたくしが所有する作品のひとつは一九九〇年ごろ製作の作品であるが、上記二〇世紀はじめの作品について論評された特徴を正確に伝えている。このことは、技法と文様が今もなお、百年前、さらにはムガル帝国時代（二五二六〇一八五八年）にまでその源流を遡ることができるとを意味する。染織美術史は、そこからさらに歴史を遡り八世紀に作られたインド製の押捺媒染布の断片が中央アジアで発掘されたこと、また同じころアジャンタ石窟の壁画にも同様なものが見られること、などの考古学上の発見によつて木版押捺媒染の技法がはるか昔、八世紀ごろまで遡るといふ。ま

さにインドの染織は悠久の歴史が生みだした大地と人間の英知そのものといっても誇張ではない。いくつかのカーズト職業集団によって成り立つサンガネールの染織と染織品はここを訪ねる人の興味如何によって万華鏡に似てさまざまな顔を見せてくれる。先にふれた日本更紗のインド北西部をその源流とする「東方文化伝播説」に興味をもつものにはサンガネールの職人集落にいくつかの異なる「機」^{はた}が今も使われていることに好奇の眼を向けるに違いない。また、技術の発展史からは、原始機から地機、さらに高機へと展開した染織の歴史の原型がここにあることに知的興奮を覚えるに違いない。人々の暮らし振り、あるいは染織品の用途別にみると、多種多様な宗教儀式用に作られた祭壇布、掛布、天蓋布など、また多様な民族・部族やカーズト階層用の衣料などを見つけることができる。文様の表現法としては手描更紗（直接法）や刺繍と織技法のすべて、版更紗や絞り（以上間接法）がある。日本の日常生活に根を張ったインド更紗や絞りなどの手触りや文様の遙かな昔の原型をここサンガネールの大地に感じとる染織の旅人は多い（参考文献——岡村吉右衛門稿「概説インドの染織／世界の緋」季刊「染織の美」特集号インドの染織／世界の緋、Early Spring 一九八四年号。八一〜八八頁⁵）。

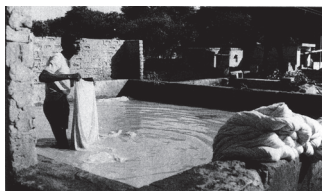
わたくしもまた、サンガネール村の染織職人達が生み出すインド更紗の美しさに感謝し

つつも、関心は、現代にも、インド伝統工芸として継承され、また、これからも引き継がれるであろう技能継承の問題に向けられていた。まず、第一の調査課題はこの伝統工芸を構成する「制作技法」、あるいは、生産工程の流れを技術・技能に焦点をおいて整理しておくこと。第二は個々の技法に対応する労働投入の型（熟練・不熟練・成人・子ども・男子・女子などの区分）を明らかにすることであった。これらの作業をつうじて、このインド北西部の社会的背景のなかでサンガネールの染織と染織品が子どもの労働と不可分な関係にあることが明らかにできるのではないかと思う。

1 製作技法の観察

サンガネール染めの工程を描写した二つの現地報告から製作技法のおおよその流れを把握することができる。ひとつは更紗づくりを八段階のフロー工程表で説明するNHK取材班『アジアの民芸』（日本放送出版会、二〇頁、一九七八年）、もうひとつは、安藤武子氏（注5）によるサンガネールのブロック・プリントの製作工程についての詳細な記述である。それぞれ個別の工程と全体のシステムとの関連を写真と解説によって説明した報告となって

泥防染のブロック・プリント



1. 下漬け前に布を洗う



4. ブロックで泥防染する



2. ミロバランの下漬け



5. 染めた布を家の庭や裏で干す



3. 布を乾す

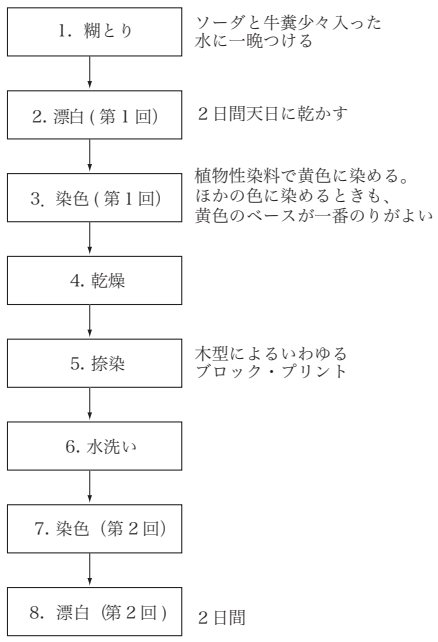


6. 藍がめで染める

提供：現地撮影の貴重な写真6点は安藤武子著『インド染織の旅』(p. 59)より源流社の許可を得て転載した。ご好意に厚くお礼申し上げます。

果によると①、②、③、④、⑤捺染「下漬けした布の上に、赤はアリザニン・ナチュラル（アラン）にツリー・ガム（Kinarの木からとる）の樹脂——松やに風のもの——を混ぜたものをブロックにつけて捺染する」黒は馬の蹄鉄を煮て数日そのまま置いて泡が出てきたもの

図3. サンガネール染めの工程



出所：NHK 取材班『アジアの民芸』日本放送協会出版会
1978年 p. 20 から筆者作成。

いる。そこで視覚的に理解しやすいように八つの工程を図示し、それぞれの工程にかかわる作業内容の特徴をくわえたものが図3である。現地撮影の写真はこれら工程の一般的な特徴を捉えている。同氏の観察結

を、ブロックにつけて捺染する。基本的には赤と黒で模様が構成されている」、⑥天日乾燥「よく日に干したあと、最後に牛の尿と糞を入れた水に浸して乾かす。これがミロバランと作用して一種の媒染の役を果たすらしい」⑥と⑧「草原や川岸に布を広げて一五日位毎日水をかけて地を漂白する」。詳細な観察の記述である。

わたくしは一九九四年、同じ地域で大略このような工程を観察したが、工程⑤「捺染」の主要部分以外にはほとんどの工程に子ども達の働く姿を見た。更紗の製作工程は基本的には、ブロック・プリントは成人熟練職人が、それ以外の工程は成人（熟練・未熟練）と子どもが担う分業の姿がある。それは技術の特性からくる労働投入の違いを示すものと考ええる。なお、今日サンガネール地域で見られる上記の工程を、久留米絣（経済産業大臣指定伝統的工芸品の高度に発達した絣）の三〇に及ぶ作業工程と比較すると技術の開発と変容の歴史過程を知ることができる（久留米絣協同組合 <http://www.kougei.or.jp/crafts/0121/f0121.html>）。

要するに、この製作工程はおよそ三つの技法から成り立っていると考えられる。①木版デザイン作成と彫り込み、（木彫り職人）、②布地デザインの製作と印刷（印刷職人）、③染めあげと乾燥処理（天日干し、染め職人）、それぞれが専門化した職人による技法で大別すると、およそ、三工程から成り立つ。親方は「捺染工程」、すなわち、②布地デザイン、

配色、染料の調査、印刷の工程にあたる。子ども達はすべての工程に配置され雑役と補助の仕事にあたる。

もうひとつ、防染法はデザイン作成と色づけ、そして絞りをかけるといふ単純な繰り返しではあるが細心の注意と技を要する作業である。通常、ふたつの工程は二人の職人によって分業され、絞り掛けは女性があたることが多い。また、家族単位の作業が多く、子ども達は補助作業にとどまる。なお、前述の(i)木版捺染法および(ii)防染法の製法と歴史、産地製品の絵図などは本章注5に掲げる文献に詳しい。なお、一一九頁に掲げるバティック絵(Batik Painting)は「庄屋の娘」(*The Portrait of a Village Damsel*)と題する染織作品である。

2 生産物の特色

二つのサンガネール染織品コレクションを名称、製作年代、技法、素材別に比較してみる。古くは一八世紀後期、多くは一九世紀後期、また素材は木綿、技法は木版捺染である。サンガネールの地に今も、生きる技法は変わることはない。技能継承の見事な実証例である。わたくしの知る限りこれほど厳密な学問上の検証に基づいたコレクションはインド国



写真：パティック画「水がめをもつ庄屋の娘」(The Portrait of a Village Damsel)
銀製アンクレット、プレスレット、ヘアピン、ネックレスなど日常性のある
ジュエリーを身につけている。サイズ 70×130 cm.
提供：筆者 個人蔵

内にはないと思う。⁽⁶⁾

まず、予備的作業として伝統工芸としてのサンガネール更紗づくりの特徴を整理することにする。方法としては、歴史的価値の高い、二つのコレクション、すなわち「スイスバーゼル民族学博物館所蔵品」と日本で唯一の個人蔵「畠中コレクション」のなからサンガネール更紗と確認できた染織品の製作技法と文様についての特徴を比較検討する。素材が木綿ということもあり、布の断片という形で今日まで残っている現物もせいぜい一

八世紀後半に製作されたもので、大部分が一九世紀という比較的最近のものである。

第一のコレクションとしてスイスバーゼル民族学博物館が所蔵するインド伝統染織の図版のうち、民族学的検証によってサンガネール更紗と確認された六点がある。それぞれの図版が示す染織品はその一部分にすぎないが、用途としては覆い布、掛布、儀式用布、更紗布などと判別されている。また、製作年代は古くは、一七八五年（刻印）、多くはおよそ一八世紀前・後期と推定されている。素材は木綿、技法はすべて「木版押捺」、染色は「媒染」その他が併用される。

第二は日本の個人蔵畠中コレクションのなかのサンガネール作品二点。それぞれの図版データにその特徴が記載されている。それぞれの用途は覆い布、掛布、台座カバー、布地、被衣（ドオパタ）など前記のコレクションのそれと同じ種類である。製作年代は一九世紀前期、多くは同後期から二〇世紀初頭の収集品である。また、技法はすべて「木版捺染」、染色「媒染・防染」となっている。解説によると、「工程は古法に近いが、染色には化学染料が用いられています。地域的な特色を保ってきた文様はしだいに忘れさられ、現代の市場の要求を反映したものとなっています」（二五二頁）という。以上二つのコレクションの比較から言えることは、少なくとも一八世紀初頭からサンガネール染めの技法と文様は今

日に至るまで、脈々としてサンガネール村の染織職人によって受け継がれてきたのである。これが伝統工芸といわれる所以である。

3 労働投入の型

全体の技法の体系が「染色」と「捺染」の基幹部分から構成されているので、熟練と専門的な知識を必要とするこれらの作業は成人熟練職人が、その他個別の作業（技法）は子ども達も達未熟練労働が関与する部分となる。わたくしは一九九四年、同じ地域で大略このような工程を観察したが、工程⑤「捺染」の主要部分以外にはほとんどの工程に子ども達の働く姿をみた。更紗の製作工程は基本的には⑤ブロック・プリントは成人熟練職人が、それ以外の工程は成人男女（熟練・未熟練）と子ども、そして家族全員が担う分業の姿をみた。それは技術の特性からくる労働投入の違いを示すものと考えてよいであろう。

むすび——砂漠の地シェイカワティからの贈り物

砂漠の国ラージャスターン、そして地図名にないシェイカワティ地方は日本人に多くの贈り物をもたらした。その最たるものがサンガネールの染織技術である。じつに多くの染織美術家がこの地を訪ね、わが国の「ジャワ更紗」製作技法の源流と遭遇したのである。また、バティック染めの源流にも出会いを求めた。シェイカワティ地方の地方都市に今も残る建造物 (*Havelis*) の壁画に魅せられた画家もまた、強烈な文化との遭遇があつたに違いない。地元出身の女流作家トリプティ・パンディ (*Tripti Pandey*) が初期の作品 *Where Silence Sings* のなかで詠う「静寂の歌」に惹かれてこの地を訪ねる旅人も多い。砂漠の地からの贈り物とはこの地を舞台にくりかえされた、悠久の歴史、王国の興亡、文明の交差と衝突、多民族の融合などが生み出した、「砂漠の民の感性」そのものだ。

わたくしもまた、幾つかの贈り物を発見した。本章のなかで紹介した工芸品のなかに砂漠の民が創りあげた、シェイカワティという「地域感性」を読み取ることができたのである。一つ目はサンガネールのブロック・プリント、伝統的デザインの三種類のベッド・カバーである。砂漠のなかに緑の世界を求める幻想が生んだ不思議な花模様が印象的だ。二

つ目は砂漠の蒼空に騎馬民族の勇姿を映し出すミーナカリ・バングルのエナメル塗り（焼付け技法）。アフガニスタンの北西バダックシャー州（Badakshan）に産する最高品質のラピス・ラズリの粉末エナメルがシルクロードの蒼を表現する。三つ目はラタンガール・アंकレットのひとつ「涙一滴の逆さ吊りアंकレット」（Inverted Tear Drop Anklets）という作品である（写真八六頁）。これは球状のアクセサリーの形が独特であって、涙一滴を逆さ吊りにしたデザインとなっている。それには、決して涙を流すことのない人生を願う娘の祈りという高度なシンボリズムがある。

シエカワティの大地はまた、一九世紀初頭から数多くの企業家商人を輩出し、マールワール（Marwar）地方出身のビジネスグループ、ビルラー財閥を築き上げた企業者精神に富む土地である。マンダワ（Mandawa）やジュンジュヌ（Jhunjhunu）の町々に今に残る壁画の館ハベリス（Havelis）はかれらの父祖達が残した富の遺産でもある。この大地には企業家精神という、もうひとつの「砂漠の民の感性」を見出したことがわたくしにとって最も大切な贈り物であった。そして、本章が扱ったさまざまな困難は必ずや克服できるに違いない。このような確信にも近い思いを抱いてシエカワティ地域のフィールドワークを終えることとした。シエカワティ最後の夜、サモッド・宮殿の屋上からみた満天の星座の輝きが、

いまでも、鮮明に眼に焼きついており消えることはない。サモッド村は灯火が消え、やみに包まれた静寂の世界であった。二〇〇一年三月、酷暑の日、とフィールド・ノートの記録にある。

注(1) シェイカワティ (Shekavati) 地域

シェイカワティ地域の社会史を読み取ることが出来る好著。Francis Wacziarg and Aman Nath, 1982. *Rajasthan: The Painted Walls of Sheikawati* および Pankaji Rakesh & Karok Lewis, SHEKAWATI: *Rajasthan's Painted Homes* (Delhi: Lustre Press Pvt. Ltd. 1995) 写真と解説文がよい。壁画画家田村能里子女史を魅了した街ジュンジュヌ (Jhunjhunu) やマンダワ (Mandawa) の城下町を中心に、壁画に埋め尽くされた館 Havelis を扱う好著である。参考となる地誌案内、*Rajasthan: Everyman Guides* および *A Handbook for Travellers in India, Pakistan, Burma, Ceylon* (London: John Murry Ltd., 1959) 初版本。また、この地域の醸し出す歴史と文化の「風」を読み取る上に、ラージャスターン出身の旅行作家 Tripti Pandey の作品三点を挙げる。Where Silence Sings. *Rajasthan's Silver Jewellery: A Living Legacy* (New Delhi: Rupa & Co, 2003) および、共著、Tripti Pandey and Toby Sinclair. *Rajasthan* (New Delhi: UBS Publisher's Distributors Ltd., 1982) 一九世紀金融資本家集団を輩出したマールワリ(族)の社会史についてはこの文献が参考になる。Anne Hardgrove. *Community and Public Culture: The Marwaris in Calcutta, 1897-1997* (New York: Columbia University Press, 2004)。

(2) 伝統工芸品

- Jasleen Dhamija, *Indian Folk Arts and Crafts* (New Delhi: National Book Trust, 2002) は「名著名著とも言われる」*くわの古典書*。Ananda K. Coomaraswamy, *The Indian Craftsman* (New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd.) 初版 1909. 序文 Alvin C. Moore, Jr.
- 生産工程の分業とカースト制の関係を示す農村社会の実態を調査したつぎの現地報告論文参照。大岡幸子「ラージャスターン州のスイハーナー村に見られるジャーティ関係」『アジア経済』第一五巻第九号（一九七四・九）七六〜九八ページ。
- (3) 教育機会の欠乏。州別、県別の詳細は中央政府の初等教育統計データベース。
Arun C. Mehta, *Elementary Education In India: Where Do We Stand?: District Report Cards 2005-06* (New Delhi: National University of Educational Planning and Administration, 2007). Vols. 1-2.
- (4) 伝統的インドカーペット
Shyam Ahuja, others, *Dhurrie: Flatwoven Rugs of India* (Mumbai: India Book House, 1999).
C. S. Gupta, *Rajasthan. Carpets of Jaipur* (New Delhi: Census of India, 1961).
Asha Rani Mathur, *Indian Carpets A Hand-Knotted Heritage* (New Delhi: Rupa & Co., 2004).
E. Gans-Ruedin, *Indian Carpets* (London: Thames and Hudson, 1984)
- (5) 伝統染織
スイスバーゼル民族学博物館所蔵コレクションの解説書
Marie-Louise Nabholz-Kartaschoff, *Golden Sprays and Scarlet Flowers: Traditional Indian Textiles from the Museum of Ethnography*, Basel, Switzerland. 日本語版『スイスバーゼル民族学博物館蔵インドの伝統染織』とみ
たのり子・熊野弘太郎訳、紫紅社、一九八六

畠中光亮編著中富貴陽子解説『Textile of India インドの染織』京都書院、一九九七

畠中光亮編著『インド染織美術』京都書院

吉岡常雄『印度更紗』一九七五

——『インドの染織』一九七八

安藤武子『インド染織の旅』源流社、一九八八

岩立広子『インド砂漠の民と美』用美社、一九八四

——『インド大地の布——岩立広子コレクション』（写真集）二〇〇七

(6) 技能継承の歴史

つぎの二つの権威あるコレクションを比較することによって製作年代や製作品の用途、そして製作技法の共通性がわかれば今日にみる類似の作品とのあいだに、いわゆる技能継承の連続性を確認することができる。

第3章 タール砂漠の児童労働

表A. スイスパーゼル民族学博物館コレクション

図版番号	名前	制作年代	素材	技法
96	覆い布／ 掛布〔部分〕	18世紀	木綿	木版押捺 媒染 西染 木版染（緑）金箔押し 銀糸のリボン付き
97	更紗布〔部分〕	18世紀後期～ 19世紀初期	木綿	木版押捺 媒染 西染 木版染（青、緑、 ペーージュ、茶）
98	儀式用布〔部分〕	18世紀後期～ 19世紀初期	木綿 モスリン	木版押捺 媒染 西染
99	更紗布〔部分〕	18世紀後期	木綿	木版押捺 媒染 西染 木版染（茶、黄色）
100	更紗布〔部分〕	19世紀初期	木綿	木版押捺 媒染 防染、 西染 藍染（地）、 木版染（黄）
101	更紗布〔部分〕	1785年 〔刻印〕	木綿 モスリン	木版押捺 媒染 西染 黄色系染料染（地）
102	更紗布〔部分〕	19世紀後期	木綿	木版押捺 媒染・防染、 西染 藍染、 木版染（黄）

出所：前掲書Marie-Louise Nabholz-Kartaschoff, *Golden Sprays and Scarlet Flowers: Traditional Indian Textiles from the Museum of Ethnography*, 邦訳「インド染織概説」235-292 ページ。『スイス パーゼル民族学博物館蔵 インドの伝統染織』とみたのり子・熊野弘太郎訳、紫紅社、1986。

表B. 畠中コレクション

図版番号	名前	制作年代	素材	技法
26	掛布	19世紀初期	木綿	木版押捺・媒染・防染
27	断片	19世紀後期	同上	以下同じ
28	布地	同上	同上	
29	覆い布	同上	同上	
30	台座カバー	同上	同上	
31	布地	同上	同上	
32	布地	19世紀後期～ 20世紀初頭	同上	
33	布地	19世紀後期	同上	
35	断片	19世紀後期～ 20世紀初頭	同上	
36	被衣（ドオパタ）	20世紀初頭	同上	
37	被衣（ドオパタ）	同上	同上	
38	被衣（ドオパタ）	20世紀初頭	同上	

出所：畠中光亨編著中富喜陽子解説『Textile of Indiaインドの染織』京都書院、1997年。

